

今回は、インクルージョン(「包み込む」教育)の話を紹介します。

スウェーデンほか北欧では、学校のみならず、社会にもインクルージョン(「包み込む」教育)の概念が進んでいて、施設がなくなっている。その人たちは、地域のグループホームで暮らしている。特別支援学校は本当はなくすべきかもしれないが、特別支援学校でないと幸せになれない子どももいる。重度の子供達はことにそうかもしれない。それから体の不自由な身体障害のある人には、特別な環境が必要な場合もある。しかし、それ以外の情緒障害、発達障害、知的障害のある子どもたちは、例外もあるが、ほかの児童と一緒にいたほうが成長するということが確実に証明されている。更に周囲の子ども達が成育するという事例がいっぱいある。

オーバーワークで大変忙しい先生方を地域で応援していこうという動きもでてきている。「コミュニティスクール連絡協議会」というような名前をつけている。全国でまだ200くらいしかないが、月例会を開き、企業、PTA、医療や福祉関係者など、地域を代表する人たちが入って、学校を支えて子どもたちをみんなで育てようという構想をもっている。コミュニティのスクールという考え方が発展すれば、「ぷれジョブ(職業体験)」などの就労支援もとてもやりやすくなる。「子どもは地域みんなの子どもたちだ」という意識が成熟していけば、ぷれジョブはもっと進むと思う。

地域の人々が理解して、社会に受け皿をつくっていかなければ、いくら障害のある人が就職をしても1ヶ月もたたないうちに辞めてしまうだろう。そうすると、「知的発達障害者はむずかしい」と雇用側は思い込んでしまう。しかし、雇用の場を見つけなかったら社会参加にはならない。雇用をしてくれる理解者がもっともっと増えれば、地域社会の絆が深まり、ぬくもりのある社会がうまれると信じている。

働く機会が与えられれば、障害のある人たちも納税者となれる。そして彼らも地域社会に貢献できるのだ。これまで隔離されていた障害者が社会の主役となるとき、失われたコミュニティが息を吹きかえすだろう。彼らが「もってうまれた役割」を果たせる時代がくると私は思っている。

そのためには、まず教育の現場でインクルージョンを浸透させ、地域社会の意識を変え、子どもたちを新しい世代に向けて教育することがなよりの基盤づくりになると思う。

設問 1 特別支援学校でないと幸せになれない子供達はどういう方々ですか？

()

設問 2 情緒障害、発達障害、知的障害のある子どもたちは、どのような事が確実に証明されていますか？

()

設問 3. どのような意識が成熟していけば、ぷれジョブはもっと進みますか？

()

設問 4. 雇用をしてくれる理解者がもっともっと増えれば、どのような社会がうまれると言っていますか？

()

設問 5 障害のある人が「もってうまれた役割」を果たせる時代がくるためには、どのような基盤づくりが必要ですか？

()